

全体討論のまとめ

西垣 順子
高等教育研究開発センター

1. 各報告への質問

1.1. 森岡先生の報告に関する質問

【司会】 飯吉先生からコメントをいただきました。また、ご報告いただいた3人の先生方への質問を、参加者の皆さんからいただいていますので、その要点を紹介します。

まず森岡先生への質問です。1つは、多様な学びを経験して多様な視点を持つことは、現シスの学生さんの素晴らしいところだが、そのことを学生さんが自分で理解して人に説明することは難しくもあるということに関する質問で、学生さんがそういうことを説明できるようになるための工夫や、研究科や学域が掲げている理念や教育目標を共有するための工夫が、座談会以外にもあれば教えてほしいという質問でした。もう1つはコメントで、いろんな専門分野の多様な先生方がおられて、価値観なり世界観なりが一致するとは限らないけれども、無理に一致させる必要もなく、お互いに違いを前提としてやっていくというところが大変示唆的であったというコメントをいただいております。

【森岡】 先ほど、座談会、対談の具体的なテーマについての質問もありましたので紹介します。例えばですが、「人間システムとサステナビリティ」という授業では、心理学的概念に対して福祉学、社会学、情報学の先生がお話するというものがありました。例えば、心理学の認知的不協和や確証バイアスという概念、つまり、好きなものだけを見たり、自分の見解と対立するものを避けたりという心の動きについて、そのような情報の偏りが生じないような学習サポートシステムをどうやってつくればいいのかという知識情報の先生のコメントがあったり、生活保護とか貧困層とか、そういう社会的な分断の話と結びつけてコメントをしたというものです。

また、学域・研究科が掲げる理念を改めて全体に共有することは、授業としては恐らくないと思います。ただ、漠然とした言い方になりますが、何となく教員が共有している価値みたいなものは感じていて、それが同じ教育組織の中で、同じキャンパスの中で過ごしていくと、ほとんど無形のまま伝わるのではないかという期待はあります。でも、教員同士でも膝突き合わせて、「この理念は…」 「SDGsは…」 と、活発に議論する機会も少ないですし、それができれば、FDとして有用かなと思います。言葉としてしっかり伝える機会もあってもいいかもしれないし、それがなくても伝わるかもしれない。でも、いろんな学生がいるということ自体が何かを体現しているかもしれない。このようなことで、改めて伝える機会は、今のところはありません。

それと、これは感想ですが。先ほど教務的に大変ということも言いましたが、教員全員が学際志向というわけでは恐らくないですし、自分とは全然違う方法論や価値観の教員がいることが、必ずしも全てポジティブというわけではないと思います。それでも、教員自身がいろんな授業のやり方と接して、「自分とは違うやり方があるんだな」とか、「異なる志向の学生・教員がいるんだな」ということを知ること自体がFDとして機能するのではないかという点については、僕もそう思っています。それをどこまで一致させるのかは、少々難しいと言いますか、答えは出ないけれど、継続していくしかないかなと思っています。

教育を改善していく営みと言うときの改善が、誰にとっての改善なのかとか、どのベクトルに進むのが改善なのかというのは難しいなと思っていて、アンケートの満足度で「こっちのほうが評判がよさそう」ということは言えそうな気がしますが、個別具体の学生に

とって何が良いのか悪いのかは多様だと思います。そういうものを残しておく余地は、あったらいいかなと思っています。

1.2. 北村先生の報告に関する質問

【司会】 北村先生への質問として、実習授業を受講した学生の反応として、何か特筆すべきものがありましたら教えてほしいということです。またコメントで、授業をすることで研究の視点が広がったとかいう点が興味深い、指導教員が担当している授業と連動させて教育実習をやるのが大切なのではないかというコメントをいただいています。

【北村】 学生側の反応は、少々測り難いところがあるというのが正直なところではあります。例えば、2011年に担当したときも2019年に担当したときも、私のところと彼らの採点したところで学生の答案の出来が違うかという、そうではないのです。学生は同じように取り組んでくれているし、同じように興味を持ってくれたという感じです。

ただ、15回の授業の流れの中で一番大きな特徴は、米岡さんの時は最後だったのですが、前田さんのときは途中で入れましたので、授業の流れの変化がそこできちんとできて、学生の集中力が途切れなかったかなとは、言えると思います。

あと米岡さんのときは、授業の終わった後に受講生の方にも、「(授業についての) ちょっとした検討会をやるから来てくれ」と言ったら、1人だけ来てくれたことがあったのです。その学生はそれなりに、面白がってくれていたかなと思います。教育実習的なことが、小・中・高だけじゃなくて、大学でもあるということも面白いというような感想を述べていて、学生にも一応ポジティブには思われているかなと思いました。

それから、教員自身の学びや気づきについてです。私の報告のパワポ資料で、教員にとっての意義として、「北村にとって」という注釈をつけました。指導した教員にとって、大きな意味があったことは無いと思うのです。ただ、今回の資料を作りながら思ったことは、このプレFDの試みを、文学研究科全体にフィードバックしていくような試みは、あまりしてこなかったなということです。毎年のように一応募集をかけて、

「この人が実習生になります」と決めて、「こういうふうな指導をやりましたので、認定書を出しました」と教授会で報告されますが、それは客観的な経過であり、その内実まではなかなか共有できていないということがあります。

それから思い返せば、教員によるFDでも結局、この5年間で大学教育授業実習に関するFDは1回も行われておらず、この十数年間で1回だけだったと思います。その時には、確か3年目ぐらいにこの制度を利用した教員が、成果の報告をしたのでした。それを聞いた先生方も、何か思われたことはあったと思うのですが、これも測定し難いところがあります。例えば、その後「皆さんが大学教育授業実習に応募するようになった」ということであれば、大きな変化だと思うのですが、途中で少し申しましたように、実習生を受け入れて授業をやるということは、いろんな条件が重なって初めて可能になることなので、なかなか広がりにくいところがあります。この授業実習をきっかけに何かというのは、おそらく個人的な体験にとどまっていると思いますので、何とかもう少し広げる努力をすべきだったのかなとは思っております。

1.3. 首藤先生の報告に関する質問

【司会】 首藤先生には、4つの質問が来ています。まず、医学研究科の中では多様な立場や専門性の先生方が、かなりシステムティックに業務分担をしておられるからこそ、垂直にも水平にも統合していくという工夫をしているという話をしてくださったと思うが、コロナ禍の影響などはいかがでしょうかというご質問がありました。またこれまでのご経験から、他部局で特に参考になりそうだと思うところを挙げてくださいという質問もありました。さらにこれは、森岡先生がおっしゃっていた「測りすぎ」の問題にもつながるかもしれませんが、教育をよくしていこうと思うとやることが増えてしまうが、減らしていく、なくしていったものについて、何かありますかというご質問もいただきました。最後にもう1つ、医学研究科の取り組みには、非常勤講師の先生も加わっておられるんでしょうかという質問もあります。

【首藤】 コロナ禍の影響ですが、授業は対面中止で

web授業になりました。やはり最も困ったのが実習です。学生たちも何とか意識を高く持って進めてきたというところ。一方で、転んでもただでは起きない。ウェブシステムでの講義や本日の研究会でも使っている会議システムを、みんなが習得したのは、大きなアドバンテージになりました。先ほど報告したFD講演会にもそれが反映して、聴講者が倍近くになりました。

2つめの他部局でも参考になりそうなことですが、そんな偉そうなことをやっている気は一切ありません。私たちの仕事は、教員ひとりひとりが自分で気づく場を、いかに設定するかということにかかっていると思います。「これこれをしなさい」みたいな受動学習は、成人学習には合いません。気づけば動くものなので、そういう場をいかに、割と楽しく、しんどくなく参加させるかということが大事だと思います。

FDワークショップに関しては、教授会で決めます。教授会で決めて、決まりましたからといって、トップダウンで実行します。決めるときには、反対意見はありません。「代わりに何かアイデアを出してください」と言っても出ないので、「ではこれでいきます」と言って実行しています。いろいろ思っている先生もおられるかもしれませんが、基本的には良いことをやろうと思っているので、反対意見は出なかったというところかと思っています。

あと、学生を巻き込むのはマストだと言っています。教育する側と受ける側、両方がコンタクトして、両方がバイディングして進めるのが本来の教育です。「自分たちが教えたこと」と「学生が教えてほしいこと」とは違うかもしれないわけです。教育系のFacultyでよく言うのは、「先生方、自分たちも教育を受けてきて、面白くなかった講義やつまらなかつた実習があったでしょう。そのとき、つらいわあって言いながらやってきたでしょう。教員になって、それを変えられるチャンスがあるんですよ。こんなにいいこと、ないじゃないですか」と、発破をかけるというか、こんなチャンス、めったにないよというようなことを言っています。

また大事なものは、Facultyだけでは進まないところだと思っています。職員、スタッフが大事です。学務課の課長代理もそうですし、課長も非常にアグレッシブで優秀、その2人に触発されて、うちの学務課の若手

スタッフたちは本当にやる気を出しています。いかに彼女・彼らのモチベーションをアップさせるかです。「みんなでうちの大学からいいお医者さんを育てようよ」、「1人ずつの力がすごく大切だよ」と、職員の方々が仕事にモチベーションを持ってもらえるようにする。一緒にやるんだと巻き込んでいくこと、彼女・彼らに対してリスペクトを持って接することは、常に心がけています。

最後に「測りすぎ」の問題です。よく「評価はどうするんです」、「これでどんな効果があったんですか」と言われますが、それは10年、20年、30年先に分かることだと思いますし、それではダメですかと思います。私は今日、森岡先生の話聞いていて、すごく印象に残ったことがあります。「卒業生たちと話しているときに、先生の無駄話がすごくよかったですって言われて、ショックでした」と仰っていましたが、私は拍手喝采でございました。そのとき分からなくても、後になってじんわり分かってくることは、たくさんあります。だから、私たち教員はサボってはいけないと思います。一期一会のつもりで、各学年のひとりひとりの学生たちに接するのだと思います。彼らは、今は分からなくても、5年経ち10年経ったら、「あのときの先生の話、こういうことだったのかな」と振り返る。それは非常にハートフルなことではないかと思っています。

もう1つ、非常勤講師の方に関する質問もありました。非常勤講師の方は今のところ、FDには入っていません。他方で、6年生には病院実習があって、個々の病院や医療機関に実習に出るのですが、その先生方は喜んで入ってくれます。医学部教員と病院の先生方間で、互いに気づくことなどがあり、「うちに実習に来る学生たちには、今はこういうことが求められているから、これに耐え得るような学生たちを、意識して教育してください」という要望などをいただく。最初、病院の先生方の出席はマストではなかったのですが、「面白いから行くわ」という感じで、参加者がどんどん増えて、教員同士、先生同士のネットワークもできてきて、ありがたく思っています。

2. 「測りすぎ」「やりすぎ」という問題について

【司会】 ここまでの話を伺っていると、教職員と学生も含めて、大学構成員コミュニティのようなものをどう作るか、そして、どこかで得られた知見をどう共有するのかというあたりがポイントとして出てくるかなと思いました。それは、本日のFD研究会のように、正面からそれを狙って実践する場合もあれば、他の形もあると思います。またその辺がうまく回ると、「測りすぎ」「やりすぎ」という問題も、どのあたりで着地させれば互い苦しくならずにはやれるかというところの、合意形成も出来ていくのかと思いました。

【飯吉】 今の点とも関連すると思いますが、先ほど森岡先生がおっしゃった「改善」という言葉の使い方は、気をつけないと異なる印象を与えてしまうと、改めて思いました。市大でも「改善」という言葉は、「もっとやれ」とか「比較してこれだけよくなった」ということを、厳密に管理しようとして使っていた言葉ではありませんでした。本学ではすでに質の高い教育を実現していて、学生も満足しているという調査結果もあります。ただ、学生も学生を取り巻く環境もどんどん変わっていきますし、学力の問題なども変わってきます。また何よりも、学問も発展していきます。その中で、より良いものを常に探究し続ける、努力し続けるという意味で、「改善」という言葉を使っていました。しかし下手をすると、「どう測るのか」というところばかりにフォーカスが行ってしまい、本来の意図と違う形になってしまうのだなというところを改めて思いました。

Staff Developmentの話は、さきほど私はあまりしなかったのですが、市大ではSD委員会をつくって、全学の職員の方がどれぐらい研修をやってらっしゃるかを整理したことがありました。実際のところ、相当な量の研修をやっていきます。それはFDも同じだと思います。

必要と思っただけでやっておられるものを否定するわけではないのですが、うまく整理したり、全学FDを活用していただく形で負担を減らすことも、疲弊しないためには必要かもしれません。そういう体系的なFDができるためにも、全学として情報を共有したり、コンテ

ンツやプラットフォームを活用していただくとか、そういうことが大事かと思います。新大学では教育改革委員会に各部局の代表の方が来てくださっているのです、そこをきちんと機能させるということも大事かと思いました。

3. 大学で学ぶためのレディネス不足をどう考えるか

【司会】 参加者の方からご質問をいただきました。工学研究科の方です。要約すると、例えば数学に関する基礎的な学力が十分ではないと思われる学生が入学していて、この問題を何とかしないと本学のFDが十分機能しないという懸念を持っているが、大阪府・市の中学・高校の先生方との連携に関する戦略を教えてくださいという質問です。

【フロアから】 私は数学の演習科目を担当しているのですが、そこで使う記号（アルファベットやギリシア文字）を書くのが難しい学生が今年は過半数を超えてしまいました。このあたりは高校までで身につけてほしいところです。うちは公立大学なので、高大連携をしっかりとやることで何とかできないかと思うのです。医学部の学生に関しても、どこかのお医者か学生だったか忘れましたが、アルファベットが分からないから、カルテが読めないという話も聞いたことがあります。本学でもこういった事例が、起きているのかどうかを知りたいと思います。FDを考える上では、学生の水準を知っておく必要があると思います。

【司会】 では先生方から、ご意見などありましたら。

【北村】 数学と一番縁のない文学部から話をしますが、本日お話ししたプレFDは、大学で学んで研究していく力という点では上位の人の話を中心でした。そうなるのは、文学部は様々な学問が集まっていて、共通の教育というものが無いわけですね。例えば英語などの外国語は基本になりそうなのですが、私の専門の西洋史の授業を英語でやりますと言えば、英語に対する抵抗感のない学生だけがやってきて、英語が苦手な学生は他に行きます。このように学生は、自分の弱いところと強いところを見定めながら、選択をしていると思います。

文学部の場合は結局、いろんな学問分野が寄り集まっていて、求められるものが違ってきます。このことは

実は、文学部のFDや高大接続を考える上で、別の難しさが出てくることにもなります。我々が高大接続といって高校に行ったときに、何を教えられるかということであり、学生に何を学んできてほしいと言えるかということです。定まったものがないので、問題の状況が異なるように思います。

【フロアから】 私は企業でも何社かに勤めたんことがあって、人事にも関わったことがあります。学生がこのような状況では、これから景気が悪くなっていくうちの学生が採用してもらえなくなる。そうすると、うちの大学のブランドをどう確立するのかという問題になってくると思います。そういうことも含めて、よく考えていただきたいと思います。そして企業にも雇ってもらえる水準の学生を育てるためには、入学時の水準が低くは難しいわけなので。

【司会】 多くの論点が入っている大事な問題だと思います。高大接続という場合にも、高校の先生方への期待と我々大学が何をするかということ、お互い様の関係でもあります。その上で、先生方が授業の中で苦勞しておられることなども持ち寄って、全学や部局のFDでできることもあるかと思います。時間がオーバーしてきていますので、学生をどう理解していくかという問題について、また引き続いて考えていくことができればと思います。

司会の不手際で上手くまとめられていませんが、森岡先生と首藤先生からも、何かありましたらと思いますが、いかがでしょうか。

【森岡】 基礎学力がないと、そもそも学びの入り口に立てないという、理系の先生方の悩みはよくわかりました。僕の授業ではむしろ、主体的にあなたの考えを述べなさいっていうふうに質問するときに、「私の考えなんてありません」とか、「高校までは言われたことをこなすというふうにやってたのに、大学へ入ったら急に、あなたの意見とか言われて困ります」みたいなことは言われたことがあります。でも、それは大学でしっかり時間をかけて、4年間で自分なりの言葉を見つけてくれればいかなって思います。

【フロアから】 社会はこれからどんどんグローバル化していくので、意見の言える高校生になっておいてもわからないと困ると思います。

【司会】 どうもありがとうございました。大学としてなにかができるのかということを確認しつつ、今後とも様々な経路で、教育・FDについて考えて行ければと思います。時間がオーバーしておりますので、これで終了させていただきます。